

◆ 自分たちで決めた未来 ◆

大阪府立淀川工科高校といえば全国吹奏楽コンクールの常連校としてその名が高いが、今年度はコンクールへの出場を辞退したという新聞記事を読んだ。

制限された部活動の中で、楽曲を十分に仕上げるだけの時間がとれないという理由の他に深刻な問題があったという。それは、長く顧問をされているM先生が体調を崩し、指導が難しくなったとのこと。M先生は、最終的な判断を生徒に任せたという。

キャプテンのKさんは、各パートの代表者を集めた。

「何が何でも出るべきだ」という声の一方で、「練習不足で金賞を取れなかったら先輩たちに申し訳ない」という声も聞こえたそうだ。

きっと熱い議論が繰り広げられたのだろう。Kさんはこのやり取りの最中、「純粋に音楽をやっているときの楽しい感覚」を思い出したそうだ。編集委員の吉田純子さんはこう書いている。「…そうだよな、僕がやりたかったのは音楽で、コンクールがすべてじゃないんだよなー辞退の結論はみんなで導き出したものだと思う。」

人生は選択の連続である。淀川工科高の皆さんはコンクールに出場しない選択をした。昨年度から続くコロナ禍の中、理由はどうあれ、既定路線とは違う選択をせざるを得なかったケースは、この事例のみならず様々な分野でおそらく相当な数に上るだろう。中には、昨年度の夏の甲子園やインターハイなど、行事そのものが中止になってしまったものもある。

「レジリエンス」という語が浮かぶ。野口聡一さんが搭乗した宇宙船クルードラゴンに、搭乗員4人で相談して決めた「回復する力」を意味するこの言葉。新型コロナウイルスで苦しむ世界が元に戻るための力になりたいとの思いを込めたそうだ。

吉田さんは、「吹奏楽をやったことの本当の意味を、彼らは社会に出て初めて見つけるだろう。」と愛情を込めて綴る。部活動の在り方については様々に語られるが、「レジリエンス」の一つの具体を見る思いがした。

昨年度末の本校吹奏楽部の定演についてはこのメッセージでも触れた。逆境が福となることも



ある。臨時休校がようやく終わり、放課後、楽器の音が再び聞こえてきた。来年の3月、彼らはどんな「レジリエンス」を見せてくれるのだろう。素晴らしいステージとなることを願っている。

(参考、引用：9月4日付 朝日新聞 「多事奏論」)